

研究拠点形成事業
平成 27 年度 実施報告書
A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	東京大学東洋文化研究所
アメリカ拠点機関：	プリンストン大学
フランス拠点機関：	社会科学高等研究院
ドイツ拠点機関：	ベルリン・フンボルト大学

2. 研究交流課題名

(和文)： 新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築
(交流分野 歴史学)

(英文)： Global History Collaborative
(交流分野： History)

研究交流課題に係るホームページ：[http:// coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/](http://coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/)

3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日
(2 年度目)

4. 実施体制**日本側実施組織**

拠点機関：東京大学東洋文化研究所

実施組織代表者（所属部局・職・氏名）：東洋文化研究所・所長・高見澤磨

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：東洋文化研究所・教授・羽田正

協力機関：

事務組織：東京大学東洋文化研究所事務部

相手国側実施組織（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

(1) 国名：アメリカ合衆国

拠点機関：(英文) Princeton University

(和文) プリンストン大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Department of History・Professor・
Jeremy ADELMAN

協力機関：（英文）
（和文）

経費負担区分（A型）：パターン1

（2）国名：フランス共和国

拠点機関：（英文） Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales
（和文） 社会科学高等研究院

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Research Centre for History・ Directeur
d'Etudes・ Alessandro STANZIANI

協力機関：（英文）
（和文）

経費負担区分（A型）：パターン1

（3）国名：ドイツ連邦共和国

拠点機関：（英文） Berlin Humboldt University
（和文） ベルリン・フンボルト大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Institute of Asian and African Studies・
Professor・ Andreas ECKERT

経費負担区分（A型）：パターン1

協力機関：（英文） Berlin Free University
（和文） ベルリン・自由大学

経費負担区分（A型）：パターン1

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

1. 新しい世界史理解と叙述の探求と確立：従来、世界各地における世界史の見方は、ヨーロッパ中心史観を下敷きとするという点では共通点を持ちながらも、国や地域によって多様だった。この多様な世界史の見方を拠点間で相互に参照・批判するとともに、現代世界において必要な地球への帰属意識（地球市民意識）を共有できる新しい世界史の理解と叙述の方法を、拠点間の議論を通じて探求し確立する。

2. ミクロな歴史研究との交流：新しい世界史研究の成果を、一国史や地域史などミクロ・レベルの歴史の研究者に投げかけて当該研究領域における既存の知の再検討を促す。また、その再検討結果を新しい世界史の解釈に活用する。この相互往復運動の繰り返しによって、歴史研究全体の活性化を図る。

3. 上記2つの大目標を達成するために、4研究機関が緊密に連携し、新しい世界史研究と教育のためのネットワーク型拠点を構築する。このネットワークによって実現を図る主な事業は次のとおりである。

①研究者の交流：毎年一定数の研究者、PDを他の3拠点機関に派遣し、同時に3拠点機関から研究者を受け入れる。派遣・受け入れ研究者は、派遣先・受け入れ先で講演や授業を行い、国際共同研究に参画する。

②①と連動させる形で、毎年いずれかの拠点機関でテーマを定めた研究集会とセミナーを開催する。

③毎夏、いずれかの拠点機関で公開サマースクールを開講し、4拠点機関の大学院学生を中心に広く世界の若手研究者に世界史学習と研究交流の場を提供する。また、博士論文を準備中の大学院生に対して、4拠点機関の研究者からなる指導チームを編成し、より完成度の高い論文が執筆できるように共同で指導する。

5-2. 平成27年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

初年度の事業を通じて形成されつつある4拠点間の相互理解と協力関係をさらに深化させ、安定的な研究協力体制の構築を目指す。

<学術的観点>

各国、各言語によって微妙に異なる新しい世界史/グローバル・ヒストリーの意味や研究方法を確認し、学術面での相互理解を進める。

<若手研究者育成>

初めてのサマースクールを日本で開催し、各拠点から参加する複数の研究者が共同で大学院学生を指導する。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

日本国内において、新しい世界史/グローバル・ヒストリー的な歴史研究への理解を深めるための取組を企画する。

6. 平成27年度研究交流成果

(交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。)

6-1 研究協力体制の構築状況

東京での第1回サマースクールと公開シンポジウム、さらに、4拠点の研究者がパリに集まって開催した方法論のワークショップなどを通じて、4つの拠点間の研究協力体制は大いに深まった。以下、拠点ごとに具体的な状況を説明する。プリンストン大学：Global History Collaborative (GHC) の活動を強化するため、プリンストンと東大の二大学間で、グローバル・ヒストリーに関する学術交流基金を新たに獲得しようとの提案が、プリンストン側代表の Jeremy Adelman 教授からあり、両大学による研究費公募に申請したところ採択された。プリンストン側は新たなファンドを2016年9月から使用する予定である。ベルリン大学：フンボルト大学と自由大学は、共同でグローバル・

ヒストリー研究の博士課程コース設置を計画しており、その立ち上げ資金を申請したドイツ学術財団によるヒアリングが、2016年3月8日にベルリンで開かれた。GHCを構成する他の3拠点から各1名の研究者がこのヒアリングに参加し、羽田は3名を代表して、国際的なグローバル・ヒストリー教育研究の重要性と新コース設置の意義を強調する応援演説を行った。最終結果は5月に発表されるが、審査員の反応はよかったと聞いている。このように、ドイツ側にとっても、GHCの教育研究ネットワークはきわめて重要な意味を持っている。フランス側の社会科学高等研究院（EHESS）との交流については、定期的に研究者が東京を訪れる体制がすでに構築されている。2016年度についても、有力な研究者が12月に1ヶ月東京に滞在することがすでに決まっている。

6-2 学術面の成果

2015年9月のサマースクールの際、東京に集まった4拠点の有力研究者によってシンポジウム『グローバル・ヒストリーの可能性』が開催された。議論は、シンポジウムが終わった後もサマースクールの期間を通じて継続的に行われ、その成果を本にして日本で刊行することとなった。シンポジウム当日の報告者に加えて、各拠点から2～3名が、グローバル・ヒストリーの方法論と具体的な研究成果を論文の形で提出することになっている。外国人研究者の論文は翻訳の上、日本語の論集として公刊する予定である。また、GHCの国際ネットワークを通じての議論による成果の一部として、1. 羽田正（編）『グローバルヒストリーと東アジア史』（東京大学出版会、2016）2. Sebastian Conrad, *What is Global History?* (Princeton University Press, 2016)が出版された。

6-3 若手研究者育成

第1回のGHCサマースクールが、東京拠点の主催で行われ、各拠点から研究者各3名、大学院学生各5名（パリからは4名、東京からは7名）が参加した。1週間に亘るスクールでは、参加した大学院学生の博士論文計画をめぐって充実した議論が展開され、学生たちは自分自身の研究の内容についてのみならず、この種の会議での議論の仕方や他の研究への批判や助言の方法など多くを学んだ。また、1週間起居をともにした学生たちは、同志としての意識を共有するようになり、サマースクール終了後も、共同で論文を執筆するために、スカイプなどを用いて定期的に会合を持っている。

2015年2月から4月にかけてベルリンに派遣した大学院学生は、9月下旬から再度ベルリンに赴き、10月初めに「Museumのグローバルヒストリー」と題するワークショップをGHCのベルリン拠点で開催した。この経験を活かして目下博士論文の仕上げにかかっている。2015年度には他に、プリンストン大学へ大学院学生1名（2015年9月～2016年3月）、若手研究者1名（2016年1月～4月）、EHESSへ大学院学生1名（2015年10月～2016年3月）を派遣した。全員が滞在の記録をGHCのウェブサイトにブログの形式でアップしており、これらを読む限り、きわめて有意義な留学生活を送っている。3名中の2名はすでに帰国しており、今後のGHCへの貢献が期待される。

2016年度についても、プリンストン大学に、5月のサマースクールに3名、10月から6か月の留学に2名の派遣を予定している。

他方、他の3拠点から、東京大学東洋文化研究所を訪れたPDとPhD学生数は、プリンストン3名、ベルリン3名であり、彼らは本事業のコーディネーターである羽田の大学院授業に出席してグローバル・ヒストリーの手法について学ぶとともに、コーディネーターが設けた様々な機会を利用して東京大学の大学院学生や若手研究者と積極的に交流した。

6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

コーディネーターの羽田は、新しい世界史/グローバル・ヒストリーの重要性を学界や一般に普及するための活動に従事し、今年度だけで7回の講演（国内3回、国外4回）を行った。また、大学院学生・ポスドクらとともに、小中学生が新しい世界史の見方を理解できるように工夫を凝らした絵本として、『パノラマ世界史』全5巻（大月書店）を刊行した。

6-5 今後の課題・問題点

拠点形成と国際ネットワークの形成は、予想を超えるスピードできわめて順調に進んでいるが、以下の2点は、事業の今後のさらなる発展を考えた際に重点的に取り組む必要のある課題である。

1) 日本国内における協力研究者の拡大：他の拠点がある米・独・仏に比べると、日本国内における歴史研究者のグローバル・ヒストリーへの関心は、まだあまり高いとはいえない。従来の枠組みで研究を行っている研究者や若い研究者を、この新しく、重要な研究領域へどのように招き入れるかを真剣に考えねばならない。

2) 他のアジア諸国の研究者との連携：4つの拠点間の連携と協力の体制はすでに確立した。東大拠点は、今後、東アジアに位置するメリットを活かし、中国、韓国や東南アジアの歴史研究者にとっても重要な連携研究の拠点となれるように、研究活動に工夫をこらしてゆく必要がある。

6-6 本研究交流事業により発表された論文等

(1) 平成27年度に学術雑誌等に発表した論文・著書 17 本

うち、相手国参加研究者との共著 0本

(2) 平成27年度の国際会議における発表 17 件

うち、相手国参加研究者との共同発表 0件

(3) 平成27年度の国内学会・シンポジウム等における発表 12 件

うち、相手国参加研究者との共同発表 0件

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

7. 平成27年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成30年度
研究課題名	(和文) 世界史/グローバル・ヒストリーの方法 (英文) Methodology of World/Global History				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 羽田 正 東京大学東洋文化研究所・教授 (英文) HANEDA Masashi, Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Jeremy ADELMAN, Professor, Princeton University Alessandro STANZIANI, Directeur d' Etudes, EHESS Andreas ECKERT, Professor, Berlin-Humbolt University				
参加者数	日本側参加者数	41名			
	アメリカ側参加者数	15名			
	フランス側参加者数	15名			
	ドイツ側参加者数	18名			
27度の研究交流活動	<p>1. 東京における講演会開催 来日した他の3拠点の研究者による講演会を開催した。フランス拠点・アメリカ拠点・ドイツ拠点の研究者による講演会をそれぞれ5回、1回、1回、計7回行った。また4拠点の研究者を登壇者として、グローバルヒストリーに関する公開シンポジウムを開催した。協力研究者のみならず、多くの研究者や学生、一般人が聴衆として参加した。</p> <p>2. 海外拠点での共同研究会の開催 協力研究者(1名)及び若手研究者(1名)をフランス拠点に派遣し、共同研究会を通じての研究交流を進めた。若手研究者をドイツ拠点に派遣し研究交流を行った他、"Museum in Global History"に関する共同研究会を海外拠点の研究者と共に主催した。協力研究者3名がフランス拠点との共催セミナーに参加し講演を行った。</p> <p>3. サマースクールの開催 東京で1週間サマースクールを開催した。日本および海外3拠点からの研究者および若手研究者(計39名)が参加した。</p>				

<p>27年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 世界史/グローバル・ヒストリー研究における4拠点間での研究交流の深化と研究協力体制の構築 2. 世界史/グローバル・ヒストリー研究において、日本人研究者の研究の重要性を諸外国の研究者が認識したこと 3. サマースクールにおいて、大学院学生を4拠点の研究者が共同で指導し、グローバルヒストリーの研究方法について、一定の合意を得たこと 4. サマースクールを契機に他の3拠点の指導的な研究者が日本を訪れ、彼らの言動が日本の歴史学界に刺激を与えたこと
--------------------------------------	--

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Global History Collaborative”
開催期間	平成27年11月 4日 ~ 平成27年11月 6日 (3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) フランス、パリ、社会科学高等研究院
	(英文) France, Paris, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 羽田正、東京大学東洋文化研究所・教授
	(英文) HANEDA Masashi, Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Alessandro STANZIANI, Professor, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (フランス)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	5/ 39
	B.	0
アメリカ 〈人/人日〉	A.	2/ 8
	B.	0
フランス 〈人/人日〉		12/ 36
		50
ドイツ 〈人/人日〉	A.	2/ 6
	B.	0
合計 〈人/人日〉	A.	21/ 89
	B.	50

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	4 拠点の主要な研究者が一同に会し、相互の世界史認識と問題関心を確認する。特に、サマースクールで主として大学院学生が議論する歴史研究における尺度や規模の問題を取り上げ、主要メンバーがさらに突っ込んだ議論を行うことで、世界の新しい世界史/グローバル・ヒストリー研究分野において指導的立場を獲得することを目指す。		
セミナーの成果	<p>1. 世界史/グローバル・ヒストリー研究における尺度や規模について、4つの拠点に所属する研究者の認識の相違と共通点が明らかになり、研究者間での相互理解が進んだ。</p> <p>2. 4つの拠点が目指すべき研究の前提と方向性について、以後の共同研究を展開する上での基盤となる合意が生まれた。</p> <p>3. 今後共同研究を進める際に重要となるいくつかの具体的な研究テーマと研究組織について、メンバー間での合意が得られた。</p>		
セミナーの運営組織	<p>プログラムの内容は4拠点のコーディネーターが話し合っ決めてるが、セミナーの実施については、パリ側がホストとして、会場を提供し、運営のすべてに責任を持つ。</p> <p>日本側は、幹事会が派遣研究者を決定し、セミナーのための特別な運営組織は作らない。</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容	金額
		外国旅費	2,127,750 円
		消費税	170,220 円
		合計	2,297,970 円
	アメリカ側	内容	
	外国旅費、謝金		
フランス側	内容		
	国内旅費、謝金、会議費		
ドイツ側	内容		
	外国旅費、謝金		

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣期間	用務・目的等
東京大学総合文化研究科・博士課程学生・寺田悠紀	ドイツ・ベルリン・ベルリン自由大学	2015年2月2日より 2015年4月24日まで	若手研究者の海外派遣・イランを中心とする美術博物館の成立についての研究および調査
東京大学工学系研究科・建築学科・博士課程学生・江本弘	アメリカ・プリンストン・プリンストン大学	2015年9月26日から 2016年3月まで	若手研究者の海外派遣・建築論壇におけるジョン・ラスキンの世界受容についての研究および調査
立命館大学文学部・准教授・森永貴子	東京大学東洋文化研究所	2015年10月24日から 2016年10月25日まで	GHCに関する出版打ち合わせ
広島大学大学院文学研究科・准教授・太田淳	東京大学東洋文化研究所	2015年10月24日から 2016年10月25日まで	GHCに関する出版打ち合わせ
長崎大学多文化社会学部・准教授・鈴木英明	東京大学東洋文化研究所	2015年10月24日から 2016年10月25日まで	GHCに関する出版打ち合わせ
北海道大学文学研究科・准教授・守川知子	東京大学東洋文化研究所	2015年10月24日から 2016年10月25日まで	GHCに関する出版打ち合わせ
九州工業大学大学院工学研究院・教授・水井万里子	東京大学東洋文化研究所	2015年10月24日から 2016年10月25日まで	GHCに関する出版打ち合わせ
東京大学学際情報学府・研究員・金ジユン	アメリカ・プリンストン・プリンストン大学	2016年1月29日から5月8日まで	若手研究者の海外派遣・1980年代の旅行記をもとにした韓国のグローバル化についての研究および調査

東京大学東洋 文化研究所・教 授・羽田正	ドイツ・ベル リン・ベルリ ン自由大学	2016年3月 7日から 2016年3月 11日まで	研究打ち合わせ
----------------------------	---------------------------	-------------------------------------	---------

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応
該当なし

8. 平成27年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	アメリカ	フランス	ドイツ	合計
日本	1		0/0 (0/0)	2/19 (0/0)	1/24 (0/0)	3/43 (0/0)
	2		1/188 (0/0)	0/0 (0/0)	1/16 (0/0)	2/204 (0/0)
	3		0/0 (0/0)	6/222 (0/0)	0/0 (0/0)	6/222 (0/0)
	4		1/63 (0/0)	3/9 (0/0)	1/5 (0/0)	5/77 (0/0)
	計		2/251 (0/0)	11/250 (0/0)	3/45 (0/0)	16/546 (0/0)
アメリカ	1	0/0 (1/31)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/31)
	2	0/0 (10/686)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (10/686)
	3	0/0 (1/163)		0/0 (2/8)	1/3 (0/0)	1/3 (3/171)
	4	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	計	0/0 (12/880)		0/0 (2/8)	1/3 (0/0)	1/3 (14/888)
フランス	1	0/0 (1/2)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (1/2)
	2	0/0 (8/104)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (8/104)
	3	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	4	0/0 (1/61)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (1/61)
	計	0/0 (10/167)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (10/167)
ドイツ	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)
	2	0/0 (10/370)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		0/0 (10/370)
	3	0/0 (1/72)	0/0 (0/0)	0/0 (2/6)		0/0 (3/78)
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)
	計	0/0 (11/442)	0/0 (0/0)	0/0 (2/6)		0/0 (13/448)
インド (日本側 参加研 究者)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	2	1/4 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/4 (0/0)
	3	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	計	1/4 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/4 (0/0)
合計	1	0/0 (2/33)	0/0 (0/0)	2/19 (0/0)	1/24 (0/0)	3/43 (2/33)
	2	1/4 (28/1160)	1/188 (0/0)	0/0 (0/0)	1/16 (0/0)	3/208 (28/1160)
	3	0/0 (2/235)	0/0 (0/0)	6/222 (4/14)	1/3 (0/0)	7/225 (6/249)
	4	0/0 (1/61)	1/63 (0/0)	3/9 (0/0)	1/5 (0/0)	5/77 (1/61)
	計	1/4 (33/1489)	2/251 (0/0)	11/250 (4/14)	4/48 (0/0)	18/553 (37/1503)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
2/4 (0/0)	15/52 (0/0)	5/9 (0/0)	0/0 (0/0)	22/65 (0/0)

9. 平成27年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	1,564,332	
	外国旅費	8,390,326	
	謝金	117,989	
	備品・消耗品 購入費	42,899	
	その他の経費	4,065,861	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	318,593	
	計	14,500,000	
業務委託手数料		1,450,000	
合 計		15,950,000	

10. 平成27年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成27年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
アメリカ 80,000[ドル]	9,520,000 円相当	80,000[ドル]
フランス 50,000[ユーロ]	6,750,000 円相当	50,000[ユーロ]
ドイツ 50,000[ユーロ]	6,750,000 円相当	50,000[ユーロ]

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。